

シュトルムの初期の短編

西 野 雅 二

岡山理科大学教養部

(1993年9月30日 受理)

はじめに

シュトルムは学生時代にはモムゼン兄弟などとの交流により、抒情詩に取り組んでおり、その成果の一端が後に『三人の友の歌集』という題名のもとに出版されている。1842年に大学を修了したシュトルムは、父親のもとで法律家としての仕事を始めており、この時期には抒情詩のみならず、散文の分野にも関心をいただいている。

ラーゲは「1842年から1847年の間に短編小説家シュトルムが誕生した。伝説とメールヒェンの収集と記録によってシュトルムは、ただ民話調の語り口を学んだだけでなく、独自の散文のスタイルも身に付けた」¹⁾と書いている。この時期にシュトルムは後年の短編小説家としての基礎がためをしており、その成果としてまず『マルテとその時計』、『広間にて』が生まれている。この2編について、ラーゲは、「短いがしっかり書きとどめられた「物語」で、ここにおいて、シュトルムの回想小説の基礎が認められる。……『広間にて』は『みずうみ』や『聖ユルゲンにて』、『水に沈む』、『告白』といった重要な小説のまさしく原形である」²⁾と評価している。

さらに、ラーゲは「初期の、1848年に書かれたスケッチ『広間にて』は後の回想小説の原形とみなされる。簡潔さ、概観しやすさの点で、シュトルムの語りのテクニックの基本的特徴を具体的に説明し、また回想モチーフの基本的な機能を説明するのに適当だ」³⁾と述べている。

本稿では、『マルテとその時計』、『広間にて』、『みずうみ』、『亡き乙女』の4編を概観し、上記のラーゲの見解を参考にしながらシュトルムの初期の短編小説の特色をさぐり、さらにそれ以降の作品との係わりについても検討を加えていくことにする。

I

『マルテとその時計』は、「私」が学校時代に下宿していた家の未婚の老婆についてのものである。「私」がマルテのことを思い出しているのであるが、メインとなるのはマルテのクリスマスイブの思い出である。

シュトルムの作品においては「思い出」が大きな役割を占めている。ラーゲによればメルヘンなどを除いた50の作品の内38編が「思い出」を扱ったものであり、実に76パーセン

トといったようにほとんどが回想小説なのである。⁴⁾『マルテとその時計』はこうしたシュトルムの多くの回想小説を創り出していく上での初期のものであり、そのための習作と言えるものである。

マルテは「私」の学校時代に下宿していた家の未婚の老婆であり、既に父母や兄弟姉妹も死んだり遠くへ行ってしまったりで、一人暮らしになっている。孤独なマルテは歴史や詩などの読書に親しみ、また小説を読んでは物思いにふける。しかし、あてのないわびしい生活のため、時には他人をかまいたいという気持ちになり、下宿人の面倒をみることもあった。このようなマルテの親しい友となるものが古くからある家具で、そのなかでもとりわけ、死んだ父親が50年以上も前に買ってきた時計はマルテの話し相手とも言えるものであった。この時計は父親が買ってきたその当時でさえすでに古いもので、まともに時を刻み、時を知らせるようなものではなかったが、これが時にはマルテに語りかけ、またマルテに色々なことを思い出させる。

マルテがクリスマスの招待を受けて外出しようとする、この時計は思いとどまらせ、子供のころの質素ではあるが幸せそうなクリスマスを思い出させる。チックタックと時計が語りかけると、マルテはまた別のクリスマスを思い出す。母親と2人だけになってしまっているマルテは、クリスマスイブに死にいく母の手を取りながら一晩中を過ごした。これらのすべてを知っている時計が今もマルテに色々なことを思い出させているのである。この作品は、時に読書、時に下宿人の世話をしたりすることもあるが、古い時計と語りあいながら、思い出の中にのみ生きている年老いた孤独な女性の姿を描いている。つらかったこと、嬉しかったことなどを思い出す思い出にふけるばかりで、マルテには未来がない、将来がないのである。正確な時を刻むことができなくなっている古い時計はこの意味で象徴的である。

この作品では、「私」の学校時代の思い出という枠の中に、思い出にふけっているマルテ、そしてマルテの思い出そのものがその中に包みこまれており、シュトルムが創作にあたって好んで用いた枠物語の形式の原形とも言えるものが見い出される。

マルテは「私は病気にかかったことがないのよ。きっと長生きするわよ。„Ich bin niemals krank gewesen; ich werde gewiß sehr alt werden.“」⁵⁾とよく語っていたとのことであるが、そのころ既にマルテは老齢であり、「私」がマルテの所を離れてから既に何年もたっている今となっては生存もさだかではない。この短編を繰り返し読む時、筆者は、将来に目を向けることのできない孤独な老人の時の過ごし方、生き方の問題を考えずにはられない。

II

『広間にて』は、市民社会の一家族の繰り返す穏やかな歴史を書いたものであり、前の『マルテとその時計』のようなりアルさには欠けているように思われる。幸せな家庭の平

和なひとこまであり、思い出される内容もあくまでも平和なものである。ここにおいては、家族の一員の死も平和な時の流れの中の一つの出来事である。

この家庭に生まれた女の子の洗礼の日、家族や来客が広間に集まっている。この物語の主人公であり、思い出を語る祖母バルバラは中では一番の年長である。牧師が帰ったあとでこれまでに家庭の中で何度も繰り返されたようななごやかな話、家族の者たちについての話がこの日にもなされているが、祖母の子供のころについてだけは何しろ祖母よりも年長の者がいないだけに誰も話せない。話をしている夕方になってくるが、話のとぎれた静けさのなかに海の単調なざわめきが聞こえてくる。祖母はこれを聞いて「何度も聞いたよ、ずっと前からこうだった。„Ich habe es oft gehört; es ist schon lange so gewesen.“」⁶⁾と語るが、これはこの家庭が何年もまえから変わらずに穏やかな家庭として続いていることを象徴するような言葉であると考えたい。

生まれた子の父親が広間を見渡して古くなったので建て替えなければと語ると、祖母は「この広間はまだ古くはないですよ、建てられた頃のことを知っているんですもの。„Der Saal ist noch nicht so alt . . . ich weiß noch wohl, als er gebaut wurde.“」⁷⁾と言って昔を思い出す。「80年前……」で祖母の回想が始まる。この広間のあるところは昔は庭だったということであり、そこではこの語り手である祖母の父親が庭の手入れをしたりしていた。夫になる人との出会いはこの庭の中でであった。ブランコに腰をおろして絵本に読みふけている少女の前に青年が現れ、自分の父親にその青年が受け入れられる様子を見たり、一緒にブランコに乗ったりする。夕食では自分からは離れた席にその青年が座り、父親と仕事の話をしたりしているのでつまらなくなる。このことがあってから8年が過ぎ去る。その8年の間、冬に夏のことを思い出すとついにはいつもあの最初の夏、出会いの夏を思い出す。再会後結婚するが、結婚のためにこの広間が建てられたのである。

ここで、シュトルムの貴族に対する考え方の一端が表現される。祖母は、昔は静かで控えめであって政治に首をつっこむ者は少なかったと語るが、さらに、今ではユンカーみたいで皆が政治にかかわりたいのか、と問いかけをする。これに対して、父親はそうだと答え、貴族は無くしてしまおうと語る。

祖母の話がとぎれた時、まわりの者達が手を握る。マルテとは違い、この祖母は幸せそうにほほえみ、さらに、この広間で死んだ夫のことを思い出す。息子が「さあ見ろ、立派な男は死ぬとこんな顔つきをするのだ。„Sieh her, so sieht ein braver Mann aus, wenn er gestorben ist.“」⁸⁾と孫に見せている。家族に見守られて死にいく健全な家庭の姿である。今は自分の夫も父母も皆いないが、ひ孫が誕生し、その子に自分の名前がつけられた。祖母はひ孫の長寿を願うばかりである。生まれた子供の父親は、この広間をとりこわし、祖母の子供のころと同じように庭にしようと提案する。

この物語の中では、市民社会の健全な姿としてのひとつの家庭の歴史が思い出として語られる。ただ一つ、昔と今との違いとして貴族に対する考え方が表現されてはいるものの、

この作品全体としてはあくまでも何年かの幅を持って繰り返される平和な市民生活のでき事を描いているものである。『マルテとその時計』のように読者に考え込ませるようなリアルさにとぼしいように思われるが、ほのぼのとした読後感を与えてくれる。

ラーゲは「この様にすでにスケッチ『広間にて』は、後の多くのシュトルムの小説の基底に横たわるあの緊張、つまり「無常感の哀愁と超克」の間の緊張を糧としている。読者は両極端の気分、すなわち人生無常の哀愁と、時の歯車を一瞬止め過去を現在に甦らせることができるという確かな慰めを、こもごも味わうのである」⁹⁾と書いているが、ここで論じている他の3編とは違って、筆者の理解力の乏しさゆえにか残念ながら「人生無常の哀愁」を読みとることができない。

III

『みずうみ』は、シュトルムの初期のものではあるが、代表的な作品となっているものであり、ここにシュトルム文学の特色の大部分が包含されている。

この物語は、老人が自分の若い時代を回想するものであり、典型的な粋物語の形をとっている。粋があることによって老人の思い出話ということが鮮明になる。粋がなかったとしたらどうであろうか。この作品はシュトルムの作品の中でも最も好んで読まれているものであるが、これは多分に粋内物語に引かれてのことであろうと考えられる。粋内物語を思い出す老人ラインハルトの姿、最後にエリーザベトと別れて以来、この粋内物語を思い出している時点に至るまでのラインハルトを思うとき、この老人のあり方、生き方にこそ焦点をあてて考えるべきであると思う。粋内物語は、老人ラインハルトの姿を浮彫りにするスポットライトのようなものであると筆者は考える。

一人さみしく時を過ごす老人の姿は、シュトルムは『マルテとその時計』でも描いている。そこでは昔を思い出す老婆の姿がリアルに表現されているが、この『みずうみ』では、回想する老人そのものの描写は少ない。しかしまた、それだけに一層老人ラインハルトの昔を回想する姿を強く前面に押し出しているように考えられる。

幼なじみの少年ラインハルトと少女エリーザベトは親しい者たちとともに、ラインハルトが勉学のために故郷を去る前に森へピクニックに出かける。二人は食事のためにのいちごを取りに行く。のいちごは取れなかったが、この時エリーザベトについての詩を作る。遊学中のラインハルトのところにエリーザベトと母からのクリスマスの贈り物と手紙が届く。エリーザベトの手紙には、旧友のエーリッヒが訪ねてくること、エーリッヒがエリーザベトの絵をかくこと、母がぜひとも言うから描いて貰ったなどということが書かれてあった。ラインハルトも二人にあてて夜中じゅう手紙を書く。

ラインハルトは復活祭の時に故郷へ帰省する。翌朝エリーザベトのところへ行くが、エリーザベトはラインハルトが握った手をそっとひっこめようとする。二人の間がどうもしっくりこない。エリーザベトの家にはエーリッヒから贈られた小鳥があり、これもライン

ハルトは気にいらぬ。詩を書いたノートを一リーザベトに手渡すと、一リーザベトは中を読んで顔を赤らめる。植物採集で採ってきたものを間にはさみ、そのノートをラインハルトに返す。

休みが終わり、勉学のために再度旅立つ日、一リーザベトが見送りをしてくれる。この時ラインハルトは大切なことを言わなければならないという気持ちになり、「また帰ってきたときも今と同じように僕のことを思ってくれるかい。„Wirst du mich wohl noch ebenso liebhaben wie jetzt, wenn ich wieder da bin?“」¹⁰⁾と尋ねる。さらに、「秘密があるんだ。すばらしい秘密。2年後に戻ってきたら教えてあげるよ。„Ich habe ein Geheimnis, ein schönes . . . Wenn ich nach zwei Jahren wieder da bin, dann sollst du es erfahren.“」¹¹⁾と言って旅立っていく。

ラインハルトはそのとき以来一リーザベトに手紙を書いていなかった。2年後、母からの手紙が届くが、そこにはエーリッヒが一リーザベトから求婚のOKをもらったとの知らせがあった。一リーザベトは何度か良い返事をしなかったものの、ついに求婚に応じたのだった。ラインハルトはこの2年の間一リーザベトに一通の手紙も書いていなかった。まったくの音さた無しであったのであり、一つにはこのせいもあって、一リーザベトがエーリッヒと結婚することになったのである。

何年か後、ラインハルトがエーリッヒの求めに応じてその館インメンゼーへ行く。一リーザベトにはラインハルトが来ることは知らされてなかったし、ラインハルトは一リーザベトが自分が来ることを知っているものとばかり思っていた。再会したときラインハルトは胸に痛みを覚えた。

ラインハルトは民謡を収集しているが、その中から知っている歌を一リーザベトも歌う。新たな紙切れには「母の求めに応じて „Meine mutter hat's gewollt“」¹²⁾という言葉で始まる詩が書いてあり、一リーザベトの紙を持つ手がほのかに震えた。一リーザベトは、自分が母親の求めに応じて、ラインハルトとではなくエーリッヒと結婚したのであり、その自分の境遇そのものが詩に描かれているのを見て感じるものがあったのである。読み終わると一リーザベトは庭へ出ていった。

その後、ラインハルトは湖岸へと出かける。湖のなかにスイレンの白い花を見つけたラインハルトは泳いでそのスイレンに近寄ろうとするが、なかなか近づけないように見える。ようやく近づくが足が水草にからまってしまい、必死に岸へ戻る。エーリッヒや一リーザベトの母に問われ、スイレンのところに行こうとしたと答える。ラインハルトにとってはスイレンは以前に知っていたものである。エーリッヒの問いに対してさらに、「以前に知っていたものだ。でも、もうずっと前のことだ。„Ich habe sie früher einmal gekannt . . . es ist aber schon lange her.“」¹³⁾と答える。スイレンはラインハルトにとっては一リーザベトそのものであるととらえることができる。

翌日一リーザベトとラインハルトが湖岸を散歩する。一リーザベトの夫と母親が外出中

の散歩であり、ラインハルトは昔に戻ったかのごとくに、またエリーザベトを昔に引き戻そうとするかのように、のいちごを探そうと提案したり、あるいはエリカの花をとり、この花を知っているかと聞いたりする。昔エリーザベトからもらったことがあるもので、エリーザベトも昔を思い出して沈黙し、目には涙をあふれさせていた。「あの青い山々の向こうに僕たちの青春がある。„hinter jenen blauen Bergen liegt unsere Jugend.“」¹⁴⁾と語ってさらに昔に思いをはせる。

ラインハルトは別れの時とばかり、翌朝まだ明け切らぬうちに家を出ようとする。エリーザベトが上の階から降りてくる。エリーザベトも、ラインハルトがもう二度とは来ないであろうことを感じている。この時に、立ったままのエリーザベトの方へ両腕をのびす。未練があるのであろうが、思いを振り切るように踵をかえして出ていく。ラインハルトはエリーザベトの結婚生活を破壊してまで自分の気持ちを貫くことをせず、あきらめてしまうのである。

以上が枠内物語であり、この枠内物語を回想していた老人は暗くなった部屋にボーッとしている。老人となったラインハルトは瞑想の中に再度遠くに咲いているスイレンを見ているようである。こうした時に家政婦が明かりを持ってくるので、老人は若いころと同じようにまた書物に向かう。

老人となっているラインハルトは、今も昔の愛の気持ちの思い出の中に生きているのであり、エリーザベトに対する愛情を持ち続けていると考えられる。最後に別れてからこの外枠の時点までずっと昔の思い出を胸にいだき、エリーザベトを愛し続けている。枠内物語と枠との間には大きな時の隔たりがあるが、作者シュトルムは、このことによって時の流れを読者に感じさせようとしているように受け取ることができる。時は速く流れさり、昔の愛もはかなく過ぎさってしまった。人生常ならずということか。そしてそのことを身をもって感じている孤独な老人ラインハルトがいる。

IV

『亡き乙女』は初期の短編であり、非常に短いものであるが、この作品においてもシュトルム文学の特色と言えるものが強く出ていていると考えられるので少しばかり見ていくことにする。

この作品も、これまでと同様に回想物語の形をとっている。ここでは大きな家の上の方の階にいる若い男が夜中にこっそりと墓まいりに出かける。墓石もない貧しい墓の黒い十字架に花輪をかけ、その十字架に頭をもたせかける。こうしてその男は墓の中に入っている乙女とのでき事を回想する。

この乙女は墓の様子から見ても、またいつも着古した衣服を身につけているという描写から見ても貧しい家の娘である。しかし、彼女は若くて美しい。彼女はその男を愛しているが、男の方は彼女を愛しているのではなくて、彼女を欲していただけであった。身分の

違いを感じてのことであろうか、男の方は2人が会っているところを他人に見られたくない。この後ほどなくして乙女は死んでしまう。生きている乙女を愛しはせずただ求めるだけだったその男は、乙女が死んでしまって初めて自分の愛に気づいたのであろうか、何年にもわたって死者を愛するはめになってしまった。

この短い作品においては、回想する主体は老人ではなく若い男という設定になっているが、思い出の中に生きるという点においては、これまで見てきた外の作品と同様であると言える。そして、この作品と非常に類似したものに後年の『告白』を挙げることができる。

『告白』では、医者であるフランツが自分の妻のガンを治すことができず、苦しむ妻に毒をもって死なせてしまうが、その時に忙しさにまぎれて見ることのできなかった医学雑誌に恩師の書いた治療法に関する論文が掲載されていた。後に、別の女性が妻と同じ病気にかかっており、それを論文に基づいて治療することができた。愛する妻を自分の手で治すことができずに死なせてしまったフランツは、後の人生を愛する亡き妻を思うことで孤独に過ごす。およそ30年間にわたってアフリカで医療に従事するが、その間は非常に孤独である。フランツは友人にあてた遺書とともれる手紙で「今ようやく、僕がここで人生の後半を過ごした恐ろしいほどの孤独の時が終わろうとしている。„Jetzt endlich geht die Zeit der furchtbaren Einsamkeit, in der ich hier die zweite Hälfte meines Lebens hingebracht habe, ihrem Ende zu.“¹⁵⁾と述べている。これは、愛する者を思って生き続けるのは非常に孤独な作業であることを実感した言葉であるが、この言葉を述べるフランツは、『亡き乙女』における若い男の姿を発展させたものであると考えることができる。

V

以上で見てきたように、これらの初期の短編はいずれも回想の形をとっている。こうした初期の創作の仕方が後のシュトルムの作品においても顕著に見受けられる。

また、シュトルム文学の真髄とも言うべきものは、後期の、人間や社会の動きを写實的に描いた悲劇的な作品にある。¹⁶⁾『後見人カルステン』では主人公のカルステンは自分の息子の度々の過ちや失敗の償いをして息子の経済的危機を救うが、明日は倒産するという嵐の日に息子がまたもや助けを求めてカルステンのところへ頼みに来る。しかし、自分が代々受け継ぎ発展させようと心がけてきた家の没落を目前にしたカルステンは、父親としての気持ちよりも財産後見人としての気持ちの方がまさり、息子を救えなくなってしまっていた。結果的に、息子は水に沈むことになり、カルステン自身もその様子を目前にして卒中になるという悲劇的な結末になっている。また『ハンスとハインツ・キルヒ』では、父親ハンスと息子の対立がテーマになっているが、ここでは自分の息子を2度にわたって追放し、その結果として息子を死にいたらしめ、後悔の念を抱きながら余生を送る老人の姿が描かれている。カルステンは悲劇を見た後に息子の妻アンナの精神的な美しさの輝きに包みこまれているし、ハンスは息子の女友達であったヴィープに支えられ、その慈悲深い愛

のこもったまなざしに見守られている。これに対して、『白馬の騎者』においては堤防監督官のハウケは自分の職務に忠実であるが、地域社会には受け入れられず、嵐の夜に堤防を見回っているとき、妻子が崩れた堤防のところで水に飲み込まれるのを見て自分も白馬とともに水の中に飛びこむという完全に悲劇的な結末を迎えている。

これまで見てきたシュトルムの初期の作品4編のうち、『マルテとその時計』のマルテ、『みずうみ』のラインハルト、『亡き乙女』の若い男の3人はいずれも、愛する者を亡くしたり、あるいは愛する者から別れ、その思い出を胸にして孤独な生活を送っている。これに対して、『広間にて』の祖母バルバラは自分の夫などを思い出しながら「今ではみんなあの世に行ってしまったよ。„Jetzt sind sie alle hinüber.“」¹⁷⁾と語るが、自分と同名の付けられたひ孫やその親などの家族に囲まれての幸せなものであり、思い出を語る時のバルバラは穏やかなほほ笑みを浮かべるほどである。したがって、ここで見た4編のうち、この『広間にて』は他の作品とは趣を異にしているが、他の3編はシュトルムの以後の作品、より完璧な悲劇性を備えた作品へと向かって行く方向性を持っている。また、『広間にて』も内容的には他と違うが、シュトルムの回想小説の原点という意味において一つのまとまった形での作品として評価されうる。

注

- 1) Karl Ernst Laage : Theodor Storm. Leben und Werk, Husum 1979, S. 20. 田中宏幸, 田中まり訳。
- 2) Ebd., S. 22. 田中訳。
- 3) Karl Ernst Laage : Das Erinnerungsmotiv in Theodor Storms Novellistik. in : „Theodor Storm, Studien zu seinem Leben und Werk mit einem Handschriftenkatalog“, Berlin 1985, S. 1
- 4) Ebd., S. 12
- 5) Theodor Storm : Sämtliche Werke in zwei Bänden, München 1977. Bd. 1, S. 12
注をつけるにあたっては、このテキストからの引用は巻数とページ数のみを示す。
- 6) Bd. 1, S. 14
- 7) Bd. 1, S. 14
- 8) Bd. 1, S. 18
- 9) Laage (Anm. 1) , S. 44. 田中訳。
- 10) Bd. 1, S. 36
- 11) Bd. 1, S. 36
- 12) Bd. 1, S. 44
- 13) Bd. 1, S. 46
- 14) Bd. 1, S. 47
- 15) Bd. 2, S. 695
- 16) このことについては、拙論『テオドア・シュトルムの「白馬の騎者」について』、日本独文学会中四国支部編ドイツ文学論集第15号 (1982), 『テオドア・シュトルムの作品における「水」の役割』、岡山理科大学紀要第18号B (1983), 『シュトルムの「ハンスとハインツ・キルヒ」』、岡山理科大学紀要第26号B (1991), 『シュトルムの「後見人カルステン」』、岡山理科大学紀要第27号B (1992) をあわせて参照されたい。
- 17) Bd. 1, S. 18

Storms erste Prosaskizzen

Masaji NISHINO

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von
der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama*

1-1 Ridai-cho, Okayama, 700 Japan

(Received September 30, 1993)

Theodor Storm hatte eine Vorliebe für das Erinnerungsmotiv und schrieb viele Erinnerungsnovellen. Storms erste Prosaskizzen zeigen schon diese Vorliebe.

Diese Arbeit behandelt vier Werke aus Storms früherer Schaffensperiode, „Marte und ihre Uhr“, „Im Saal“, „Immensee“ und „Posthuma“. Im Unterschied zu den anderen drei Werken beschreibt die Skizze „Im Saal“ eine friedliche Welt der bürgerlichen Familie. „Marte und ihre Uhr“, „Immensee“ und „Posthuma“ haben je eine Person, die einsam ist und sich an ihre vergangene Liebe erinnert. Diese drei Werke beschreiben eine tragische Welt und sind Vorformen der späteren tragischen Schicksalsnovellen.